

論文の和文要旨

論文題目: スペイン語 -dor/-nte 接辞に関する意味論的研究

氏名 : 蔦原亮

本研究では、スペイン語の -dor, -nte 接辞、および両接辞からなる派生語を扱う。両接辞は動詞に付加されることで、「～する人」、「～する物」といった主語的な意味の名詞、ならびに、語根動詞の主語相当の対象を表す名詞を修飾する形容詞を形成する接辞として広く知られている。本研究の第一の目的は、これらの接辞が派生語の意味の決定に際し、どのような働きかけを行っているのかを記述すること、つまり、両接辞はどのような意味的性質を持つのかを明らかにすることにある。その上で、以下の三点の問題を論じる：

1. 両接辞による派生名詞に多義性が生じるのはなぜか、また、派生語の「多義性の範囲」はどのように説明されるのか
2. 両接辞による派生の容認性を予測することは可能か
3. 両接辞の意味的な共通点、差異はどのように説明されるのか

1. の問題における「多義性の範囲を説明する」という点であるが、これは両接辞による派生語が、それぞれどのような意味を持ち得てどのような意味を持ちえないのかを説明することを目指すというものである。-dor, -nte はともに語根動詞の主語相当の対象を表す名詞を形成するが、主語相当の対象であればどのような対象であっても表せるわけではない。考察して得られた両接辞の意味的な性質に関する記述を基に、両接辞による派生名詞について、その持ち得る語義と持ち得ない語義を体系的に予測、説明することを目指す。

2. の問題における「派生の容認性の予測」であるが、これは両接辞がどのような動詞に付加されることができて、どのような動詞に付加されることができないのかを、意味の観点から予測、説明することである。例えば、両接辞は共に動詞 *secar* ‘乾かす’ に付加されることができ (secador, secante)。しかしながら、*matar* ‘殺す’ に付加されるのは -dor のみであるし、*sobrevivir* ‘生き残る’ を基に派生語を形成し得るのは -nte のみである。この派生の容認性を左右する意味的要因を特定することが本研究の最終的な目標の一つである。

3. の問題に取り組む意義は、とりわけ、両接辞間の意味的共通点を説明することにある。両接辞の意味的差異をめぐる先行研究はすでに少なからず存在するが、共通点に主眼を置いて論じた先行研究は確認されていない。また、両接辞間の意味的差異に関する先行研究の記述、主張も網羅的でないと考えられる。先行研究における問題点などを踏まえ、両接辞の意味的共通点と差異を細緻に記述することで、現代において両接辞が共に生産性を保ち、派生に使用され続けている理由も明らかになるだろう。

本論の構成は以下のとおりである。

まず 0 章において、両接辞の基本的な形態論、意味論的性質を紹介し、本研究の目的、取り組む問題がどのようなものであるのかを述べる。

第一章では、両接辞、ならびにその対立関係に関する通時、ならびに共時的先行研究を概観し、設定した問題について何が明らかになっていて何が明らかになっていないのかを示したうえで、本研究の新奇性、意義を論じる。本研究の最大の新奇性は、コーパスを使用した網羅的分析を実施した点、大量の新語的派生語を分析対象にした点、ならびにこれまでの研究では分析対象から捨象されてきた両派生形容詞の关系的用法を取り上げ、この用法における両接辞の意味的差異を明らかにしたという三点にあることを指摘する。

第二章から第六章では、章ごとに両接辞の形成する様々なタイプの派生語、とりわけその語義、用法を観察し、その結果から接辞に含まれる意味的性質を推測・検証する。第二章で分析するのは 20 世紀以降に一度以上使用され、かつ辞書に記載のある両接辞による派生名詞である。これらの派生名詞の語義を網羅的に分析したところ、両接辞による派生名詞の表す対象は全く異なる分布を示すことが判明した。観察によれば、-dor による派生名詞のみが、動作に対するコントロールと使役性という二種類の意味的素性を併せ持つ対象を表すこと、また、そのいずれも持たないタイプの対象は -nte のみが表すことなどが判明した。一方、当該の二種類の素性について、どちらかが陽性でどちらかが陰性といったタイプの対象であれば両接辞による派生名詞は共に表すことができることも確認している。この観察結果を基に両接辞の外項編入のパターンは語根動詞の主語相当の対象における使役性、動作に対するコントロールという意味論的素性の値の組み合わせと密接な関係にあるという提案を行う。

第三章ではこの仮説を検証するために、両接辞による新語的派生名詞をコーパスや清語辞書から抽出し、再度、二章と同様の分析を実施する。新語を取り上げるのは、新語的な派生名詞の意味の決定には動詞と接辞の意味以外の要因の関与が少ないためである。逆に言えば、語義の決定に語根動詞の語義と接辞の意味的価値以外の要因が介入している可能性のある、古くから使用されている派生名詞を分析することは妥当な手法ではない。例えば 16 世紀から用いられている派生名詞、despertador は現代においてはもっぱら、‘目覚まし時計’を表す。これは語根動詞 despertar ‘起こす’ と -dor 以外の要因、派生名詞が長い間にわたって用いられ続けたことで意味が固定化されたことによると考えられる。分析の結果、仮説の大筋での妥当性が明らかとなった。

続く第四章では両接辞による形容詞を分析する。具体的には secador/secante のような同一語根動詞からなる派生形容詞のペアを分析の対象とする。この章ではこうしたペアを形成する形容詞による N + A 型のコロケーションを観察することで、両派生形容詞がどのよ

うな名詞を修飾することができて、あるいは修飾することができないのか、またそれらが典型的に修飾する名詞はどのようなものであるかを明らかにする。この分析結果も仮説の妥当性を示すものであった。この分析には、質的アプローチによる先行研究における予測の検証としての意義もある。

第五章では Rainer (1999) が *uso nuevo* とする両派生形容詞の非主語的用法を記述する。この用法は比較的近年に用いられ始めたもので、両接辞による派生形容詞の一義的用法である主語的用法と一線を画す独立した用法である。主語的用法において、両派生形容詞の修飾する名詞は形容詞の語根動詞の主語相当の対象を表す。それ故に、*que V* と言い換えられる (*hombre fumador = hombre que fuma*)。非主語的用法とはこうした関係代名詞を用いた言い換えが不可能で、前置詞 *de* を用いて言い換えられる用法を指す (*habilidad lectora = habilidad *que lee/de leer*)。第五章ではこの用法を、名詞と動作を関連付け、分類、限定する用法、すなわち関係的用法と規定する。その上で、*-dor, -nte* 両接辞による派生形容詞の関係的用法は19世紀の中ごろからスペイン語に定着し、現代では非常に生産性と使用頻度の高い用法であることを指摘する。

この関係的用法というレベルにおいても両派生形容詞は同語根ペアを形成する。例えば、*acción limitadora/limitante* は共に容認される名詞句であり、かつ、いずれの派生形容詞も関係的解釈をとる。第六章ではこうした関係的解釈を持つ派生形容詞の同語根ペアを分析することで、関係的形容詞を派生する接辞としての *-dor, -nte* の意味的共通点と類似点を考察する。コーパスを用いた分析、およびインフォーマント調査の結論として、両接辞による関係的派生形容詞の差は意味上の主語の選択に関わるルールであることを報告する。意味上の主語とは、実際に関係的形容詞の語根動詞の表す動作を遂行する主体を指す。例えば、*acción limitadora* のケースでいえば、この語句が使用される文脈を広く観察すると、*acción limitadora del aparato* ‘その装置の制御行動’における *aparato* のように実際に *limitar* という動作を遂行する対象が意味上の主語にあたる。そしてこの意味上の主語の選択に関するルールはこれまでに見てきた派生名詞の語根動詞主語の編入、ならびに主語的派生形容詞の名詞修飾に関わるルールと同一線上のものであった。つまり、*-dor* は動作に対するコントロール、使役性のどちらか一つ以上が陽性であるような対象を意味上の主語として選択し、*-nte* はいずれも陽性である対象を意味上の主語として選択することができないと説明できる。

本研究では両接辞による派生名詞、新語的派生名詞、主語的形容詞、関係的形容詞を分析し、いずれのレベルにおいても両接辞の差異は派生語が編入ないし修飾をする対象の動作に対するコントロールの有無と使役性の有無という二種類の素性の値の組み合わせにより説明できることを明らかにした。最終章である第七章ではそれまでの議論を振り返り、0章で設定した問題を論じる。

多義性が生じる理由であるが、それは編入に関わる規則が二種類の素性の組み合わせと

いう柔軟性を持つものであるためであると考えられる。多義性の範囲についても、分析を通じて得られた規則から説明、予測可能となる。

両接辞による派生の容認性も、両接辞の主語の選択に関わる規則から説明されるだろう。いずれの接辞も、編入、修飾することのできないタイプの主語しか持ち得ない動詞には付加され得ないといえる。例えば、動詞 *sobrevivir* の主語は動作に対するコントロールも使役性も持ち得ない。そして *-dor* はこの二種類の素性の内、いずれかが陽性でなければ編入・修飾することができないため、*sobrevivir* には付加されないと説明できる。

最後の両接辞の共通点と差異であるが、これは両接辞の主語選択に関わる規則の共通点と差異として説明できる。二種類の素性の内いずれも陽性という高い動作主性を持った対象を選択可能なのは *-dor* のみで、いずれも陰性となる低い動作主性の対象を選択し得るのは *-nte* のみである。一方、いずれかが陽性で他方が陰性であるという対象を両接辞は選択し得るという点で共通している。両接辞は共通するタイプの主語を選択する接辞であるが、本質的にはそれぞれ異なるタイプの主語を編入する接辞であり、これこそが現代において、いずれも生産性を保ち続けている第一の理由であると考えられる。